

Title	両角良彦・御園生等・古藤利久三・正田彬・千種義人著 産業体制の再編成
Sub Title	
Author	古田, 精司
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.12 (1963. 12) ,p.1247(93)- 1248(94)
JaLC DOI	10.14991/001.19631201-0094
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19631201-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

くれると思うが、ともかくわれわれは、この書によって、わが国における戦後の外国労働運動史にかんする研究が一段とゆたかにされたことを著者とともに喜びたい。

(青木書店・一九六三年十月刊・A5・四三〇頁・一三〇〇円)

——一九六三・一〇・二〇——

次号目次

論 説

二部門モデルにおける分配率の決定……………富田重夫

二部門経済モデルにおける均衡成長について

——展望と一つの積極的分析——……………川又邦雄

ヒルファディングの株式会社論にかんする一考察

——とくに信用論との関連において——……………飯田裕康

資 料

第一インターナショナルにかんする一史料(その二)

——総務委員会について——……………飯田 鼎

書 評

C・N・ワードパーキンス著

『一八四七年の商業恐慌』……………寺尾 誠

新刊紹介

新刊紹介

館 蔵 著

『人口分析の方法』

人口を分析する、とひと口にいても、いろいろの局面からの接近があって、その範囲はひろい。こんにち人口を研究する学問のことをデモグラフィ(Demography)という名称でよんでいるが、これには社会学からの接近も、経済学からの接近も、すべてこれらを包括している。

しかし、人口そのものを直視するとき、そこにあるものは、生れたての赤子から、百歳を越えた老人までの男女の集団(静態)である。年々生まれ年々死んだ数(動態)が、この人口につけ加えられて殖えていくという新陳代謝が繰り返えされている。子供を生む年齢の婦人が多ければ、多くの子供が生まれるであろうし、老人が多ければ死ぬ数は多いであろう。他の事情がひとしきり、このことは正しい。

新刊紹介

このように人口には、人口の基本集団の状態如何によって、人口増加の多少が左右される。ここに人口そのものの分析方法が要請されてくる。あたかもそれは、かつてポリテイカル・イコノミーとよばれた経済学が、やがて均衡体系によってまとめられ、価格中心の分析がおこなわれるようになって、イコノミックスと改名し、独自の分析方法をもつようになったのと同じである。

ポリテイカル・イコノミーの当時に、人口は経済学の体系のなかで重きをなしたが、イコノミックスの時代に移って、人口は経済学の映像の外に追いやられた。ここに人口独自の分析方法が発達する。時の機運が育成されたといつてよいだろう。

人口を分析する基本となるものは、いまここへのべた人口の分析方法を駆使するかどうかにかかっている。統計を媒介として人口と経済・社会を分析するとき、人口の時間的・地域的分析を通じてそこにあらわれる結果の比較は、そのまま経済や社会の時間的・地域的相違を反映しているのであって、それなればこそ、人口分析は社会科学の種々の分析の基盤におかれる重要な研究なのである。

このような意味で、人口分析の方法をまとめた書物が要望されるが、これが意外に少ない。本書は著者が多年の人口研究を通じて選り抜いた人口分析の基本方法を、高級テキスト風にまとめたものであって、専門に人口を学ぶ生徒にとって好個の座右の書となるであろう。この種の書物には基本的な方法の解説のほか、実際の分析の筋道をしめした方法の適用の仕方が知りたいが、さいわい著者によって別個に用意され、本書の続編として刊行されることである(本書はしがき)。これを二部作として待ちこがれるのはひとりわたくしばかりではあるまい。なお、とくに本書は各所にあげられている文献目録が貴重である。(古今書院・形成選書・昭和三八年九月刊・小B6・二七六頁・六八〇円)

—安川 正彬—

両角良彦/御園生 等
古藤利久三/正田 彬
千種義人著

『産業体制の再編成』

「日本経済は貿易自由化の段階を迎えて、

九三(二四七)

ようやく曲り角にきている」という声はしばしば聞かれる。けれども曲り角とはなにか、と改めて反問するならば、論者によってその回答は種々様々である。つまり「曲り角」はあつても、その先に通ずる道は右曲りと左曲りとかいうような単純な道が開かれていないわけではないからである。

「産業体制の再編成」という表題の本書は、「曲り角」の先にどのような道が備えられているか、それはいかなる起伏をもち、またいかなるたぐいの障害物が待ちもっているか、という点を明快に指摘し整理を加えかつ批判を下してくれる。しかもこの作業に参加した著者は、かねがね産業体制の諸問題についてのエキスパートとして周知であり、それぞれ通産省、公正取引委員会、経団連、学界を代表して、ありうべき見解をすべて提示しカウンター・バランスしている。問題の性質上かくあるべきであつたこの企画は、それゆゑに興味に溢れまた成功を収めている。

ではここでとりあげられている具体的問題点はどうなるものであろうか。それは第五論文「論点の整理と批判その二」で要約されているように、(1)企業規模の問題、(2)企業間の過

当競争、(3)金融機関の過当競争、(4)私的独占禁止法の緩和の是非、(5)自主調整方式が官民協調方式か、の五点に示された。新産業体制論を今後とも推進してゆくためには、この五点で必要かつ充分である。たとえば財政のあり方にしても、財政投融资や企業課税が新産体制確立との関連でいかにあるべきかは、主としてこの五点に示ばつて議論できるからである。

第一論文は両角氏により新産体制論の提唱者と目される通産省の見解が述べられ、第二論文では御園生氏により公正取引委員会の反対論が開陳され、第三論文では古藤氏により前二者に反対する財界の主張が盛られてい

る。第四、第五論文は以上の見解に対する正田氏(法学)、千種氏(経済学)による学界の批判論である。読者はこれらの論文の順を追うことにより、日本経済の「曲り角」の先にある道がどのようなものか、次第に明瞭になることもまたみずから思索を強く誘発されることを覚えるであろう。

読者はまたショーペンハウエルがそうしたように、本書の末尾から読みはじめてもよい。とりわけ問題点が錯綜している課題を追

求している本書のばあいは、問題の所在を確認するためにもその方が賢明であらう。読書法はともあれ、「日本経済の現状と課題」を把むためには本書の一読は不可欠である。(春秋社・「日本経済の現状と課題」第4集、A5・二一八頁・三八〇円)

—古田 精司—

H・シャハト著
川鍋正敏訳

『イギリス重商主義理論小史』

シャハトといえは記憶する人もあろうが、ナチス支配下のドイツにおける経済相であり、ライヒスバンク総裁でもあつたヤルマー・シャハトその人であり、この著作は一九〇〇年、つまりかれが二十三歳のとき提出された学位請求論文である。

この論文の課題はきわめてはつきりのべられており、その構成もまた学位論文らしい簡潔さをもっている。シャハトはキール大学のハスパツハのすすめによって、レーザールトベルクらの重商主義論に批判を加えた。

理由も十分理解できよう。

第二にシャハトは、このように重商主義の発展過程を歴史的にとらえた、というだけでなく、経済学の理論的諸範疇の形成過程としてもとらえた。かれは重商主義を三つの時期に分ける。(六七—八頁)。第一は、財貨の流通に対する認識、第二は財貨の生産に関する認識、第三はその消費の認識、つまり「生産は消費によって制約されたものである」という認識」がこの時期の中心であるとされる。

最近進んだ重商主義の研究は、それが、商業資本と絶対王権の利益を表現する王室的重商主義と、むしろ産業資本育成をその内容とするブルジョア革命以後の議会的重商主義の二つをふくむことを明らかにした。後者にあつては、流通や、貴金属そのものが強調・重視されるのではなく、むしろその増大の原因たる国内産業資本の活動範囲の拡大の問題に重点が移るのである。貿易差額は単に財貨の差額ではなく、雇用の差額、あるいは労働差額とみられるようになり、重商主義者の眼はますます流通から生産へと移つてゆくであらう。

さらにまた、産業資本は新しい蓄積の余地

デューリングの流れをひくレーザールの主張は、要するに重商主義が、首尾一貫した体系をもつ「理論」であり、それ自体で成立する論理構成物であるということであるが、シャハトが批判を加えているのはまさにこの点である。シャハトは重商主義の著述家たちによつては「理論的諸問題はそれ自体としてはまったく論究されない。それらは経済政策上の諸問題との関係においてだけあらわれ」たと、かれらが国民経済の問題の「理論的側面に没頭した」とはいちどもなく、つねにただその実践的側面ばかりに没頭した(二一〇—四頁)ことを強調する。スマイスが「科学する人」であつて、その体系を科学的確信にしたがつて構築したのに対して「冷静かつ公平に書いたことを誇りうるであろうような人」は重商主義者の中には一人もない。(スチュアートはパーボン、ヒューム、タッカーらとともにシャハトの考察から除かれている。)

こうしてシャハトは結論する。「重商主義の理論体系なるものは存在しない、……重商主義の体系は経済政策の体系としてだけ実存する」(二〇六頁)と。したがつて経済学に對するかれらの主要な貢献は、かれらが経済

学のツールを生み育てたこと、つまり「先駆者として高層建築をつくるに十分なほどの石材を集めた」ところにあることになる。

ところでこのようなシャハトの主要な問題意識とは別に、この問題に對するかれの接近方法こそがむしろその業績——したがつてこの論文が翻訳される意味——であるといえよう。第一に、シャハトは二〇〇年に亘る重商主義を一つの理論体系としてうけ入れることを拒否し、それを実践的な経済政策の系譜としたが、そのことはかれが重商主義を形式的合理性の枠の中で、抽象的に考察するのではなく、その時代の必要との関連の中で、具体的・歴史的に考察することを可能にした。たとえば重商主義の根本的特徴とみられている貨幣の「過大評価」についても、「貨幣の問題がヨーロッパ諸国家にとって生存を賭した問題であつた時代との歴史的関連から理解するならば、過大評価というようなことはもはや問題外である」とのべている。ここにドイツ歴史学派のすぐれた歴史感覚をよみとることが出来る。さらにまたこれによつて、デューリングが重商主義の理論内容をその実践的課題からきりはなしたことを鋭く非難している